

【結語】 中心溝付近の脳実質内腫瘍の摘出術において 3D-MRI は 1) 腫瘍と中心溝との位置関係の術前評価, 2) 術中の腫瘍局在判定のためのナビゲーション, 3) 術前の手術シミュレーションとして非常に有用であった.

50 subependymoma の 1H-MRS および 201Tl-SPECT 所見

川口 奉洋・隈部 俊宏・白根 礼造
吉本 高志・清水 宏明*
東北大学脳神経外科
広南病院脳神経外科*

【目的及び方法】 Subependymoma は脳室内に発生する良性腫瘍であり, 画像診断や剖検の際に偶然見つかることが多いが, 水頭症症状を呈する症例が存在する. 術前の画像評価では特徴的な所見はないとされており, その他の脳室内腫瘍との鑑別は必ずしも容易ではない. 今回我々は, 当科において経験した subependymoma の 3 症例につき, 造影 MRI, proton MR spectroscopy (1H-MRS) および 201Thallium (201Tl)-SPECT を施行し, 本疾患と画像上の鑑別を必要とする central neurocytoma 7 例, subependymal giant cell astrocytoma 3 例と比較検討を行った.

【結果】 Subependymoma の造影 MRI 所見は, 他 2 者に比べ不均一かつ散在性に造影されていた. 1H-MRS では, 3 者とも高い choline の peak を認めた. 201Tl-SPECT では, subependymoma のみ, 取り込みを認めなかった.

【結論及び考察】 我々の渉猟しえた限り subependymoma の 201Tl-SPECT に関する報告はなく, 上記所見は鑑別のポイントとなる可能性が示唆された.

51 言語野近傍腫瘍性病変における言語野の変位に関する検討

斎藤 真・嘉山 孝正・櫻田 香
園田 順彦・佐藤 慎哉
山形大学医学部脳神経外科

【目的】 言語野近傍病変による言語野の変位を f-MRI および awake surgery を用いて検討するのが目的である.

【対象・方法】 言語野近傍病変を有する成人 3 例, 小児 2 例の 5 例を対象とした. 全例, 右利きである. 病理組織学的には成人例は全例 glioma であり, 小児例 2 例は DNT と cortical dysplasia であった. これらの症例に対して f-MRI により言語機能の局在を検討, さらに 3 例に対しては awake surgery による言語機能マッピングを行い, 病変と言語野の局在に関して検討を行なった.

【結果】 成人 3 例中 2 例で術前の f-MRI での有為な言語賦活領域が認められなかったが, 術後左大脳半球に賦活領域が出現した, 残り 1 例では術前, 運動性言語野があたかも中前頭回に存在する様に思われたが, awake surgery と術後の f-MRI の結果から腫瘍による圧排変位と考えられた. 一方, 小児例 2 例は, f-MRI にて両側性に賦活領域が認められ, 病変による言語機能障害も認められなかったことから, 両側性の言語機能の存在が示唆された.

【考察】 右利きの言語優位半球の 95 % が左と考ええると, 小児の 2 症例で両側性に言語機能が認められた事は, これまで推察されていた様に, 小児では言語機能が反対側にも移動しうることを実際に示したものと考えられる. 一方, 成人ではあたかも言語野がその周囲に移動したとき所見を呈する事があるが, その多くは病変の圧排による位置の移動で, 機能が他の脳回に移動したものではないものと考えられた.